

2025 年度

佐賀大学総合型選抜Ⅰ試験問題

教育学部学校教育課程

小中連携教育コース

(初等教育主免専攻・中等教育主免専攻)

小論文

解答上の注意事項

- 1 「解答始め」の合図があるまで問題を見てはならない。
- 2 「解答始め」の合図があったら、解答紙の所定欄に受験番号を記入すること。
- 3 問題の解答は、別に指示がある場合を除き、所定の解答欄に記入すること。
- 4 問題について、疑問がある場合は、手を挙げて質問を行なうこと。
- 5 問題紙、下書き用紙は持ち帰ってはならない。
- 6 その他、監督者の指示に従うこと。

【問】 下記の文章で述べられているドイツと日本の学校教育の違いについて概説しながら、関心をもった論点を定め、あなたの考えを800字以内で述べてください。

ドイツの学校の特徴をもうひとつ紹介しましょう。もし「ドラえもん」の「のび太」がドイツの学校に通っていたら、自室の机の引き出しに0点のテストを隠しておくことはまずできません。すぐにバレてしまいます。どうということかというテストが返却されると、親が見たことを証明するサインをして学校へ戻す仕組みがあるからです。また小学校でしたら子供の宿題を見届けるところまでが親の仕事と考える人もわりあい多い。つまり親が子供の学習をかなりフォローアップしなければならないということでもあります。そのせいか、「今日は夕方6時から子供にラテン語を教えなくちゃいけないんだ」といって、職場をさっと出る男性の知人もいました。ドイツも塾や家庭教師はありますが、日本に比べるとかなり少ないのもそのせいでしょう。ちなみに塾や家庭教師は「進学」のためにというよりも、成績が振るわないので、一定の水準にまでレベルアップするという目的であることがほとんどです。

さてドイツにおいて、「学校以外の教育は家庭の領分」という特徴を見た時、スポーツはどうなるのでしょうか。じつはスポーツも「学校以外」となるわけです。ドイツの場合、あくまで学校は「授業をし、学問を教える」ということに徹しているのです。子供たちにとって、スポーツは学校ではなく「スポーツクラブでする」のが主流となるのはこのためです。もっとも子供が小さいと親に負担もかかります。スポーツ関係のシンポジウムに取材に行ったときのことで。コーヒープレークの時間に、たまたま座ったテーブルが女性ばかり。彼女たちは何らかの組織や企業で働いていて「仕事」としてシンポジウムに参加している人たちです。私は「ドイツはスポーツクラブがあって、とてもいいですね」という話を切り出した。すると、とたんに彼女たちは「お母さん」の顔になり、「スポーツクラブがいいですって？ 送り迎えが大変よ」といった不満の声が出てきたことがありました。確かに、クラブまで自転車で行ける距離であっても、子供が小さければ一緒に行かねばならなかったりします。あるいは普通のトレーニングには自分で行けるようになって、試合などがあれば親が連れていかねばならない。もちろんどうしても送迎の都合がつかないと、「今日はウチの子供も一緒に乗せてやってもらえないか」と連絡を取り合って「タクシー業務」をなんとか別の人にお願いすることもあります。

ドイツの学校は先生の働き方も日本と異なります。小学校の先生なら、授業が終わる午後1時過ぎには、さっさと家に帰ってしまいます^①。こんなエピソードがあります。私の知人、中村実さんがドイツに旅行に行ったときのことで。中村さんの友人、ユルゲンスさんは当時「先生の卵」で教育実習中。好奇心旺盛な中村さんは、教育実習の様子を見学させてもらったそうです。授業終了後、クラスの担任の先生と反省会。時計を見ると13時を少し過ぎています。ユルゲンスさんは「先生、そろそろ終わりませんか？ もう13時過ぎてますよ」と切り出した。そのことじたい、日本の感覚からいえば驚きです。教育実習生に対する反省会の場です。ところが、担任の先生は、「あら、もうこんな時間！ 反省会はもう終わりにして帰りましょう」とお

^① 20年ほど前までは、ドイツの学校では8時頃から13時頃までの「半日学校」が主流で、昼食以後の過ごし方は各家庭に委ねられてた。しかし、2001年に公表された国際的な学習到達度に関する調査（PISA）の結果が低かったことを受けて、その後は「終日学校」の導入が推進されてきた。ただし、「終日学校」が導入されても、教育協働者（保育や福祉の資格をもつ専門家）の協力により、教員の労働時間は増えていない、と言われている。NHK視点・論点のホームページより、布川あゆみ「学校教育制度改革をどう進めるか〜ドイツの試みから」（初回放送日2024年1月17日）

開きになったそうです。そんな「ごく普通」のやり取りを目の当たりにした中村さんは「いや、なんともびっくりしました」と私にその時の様子を話してくれました。

こんなエピソードを紹介しましたが、学校の先生は家に帰って遊んでいるわけではありません。授業の準備にテストの採点など、自宅で行います。午後から家に帰り、夏休みも「休み」になるのがドイツ。そのため一般には「先生は働かない」というイメージがあります。しかし先生側からいうと、裁量制なので、「そんなことはない」と主張。平日のみならず、土日でも自宅でも働くことがあるようです。ドイツの一般的な労働者は、土日は休みなので、かなり特別な感じがあります。

ここで日本の学校と比べると、とてもクリアに教師の役割が見えてきます。それは、先生とは「子供たちに授業で勉強を教える」「子供たちに知識を授ける」のが仕事なのだ、ということです。ドイツでも授業以外の領域を、学校や先生もカバーすべきという趣旨の意見もあります。しかし日独という対比をすると、日本の先生は「授業」以外の仕事が多すぎる。ドイツの学校でも文化祭などのイベントが行われることがあります。また日本の部活に似た活動もゼロではありません。しかし「授業を行う」という本分をそれほど崩すことなく組み入れられているようです。

ちなみにドイツの学校は日本のように、職員室はありません。長いテーブルがおかれた会議室のような部屋があるのみ。これを見ても学校は、授業を行う専門家の集まりといった様子が窺えます。

ドイツの先生は本業の「授業」とそのための研究・準備などに時間を割きやすいわけですが、その理由に「責任」の領域が日本と大きく異なるということがあられるようです。ドイツの法律でいえば18歳から成人として様々な自由とともに責任を負います。それ以下の年齢は、本人の責任能力がないので、すべて親が負うこととなります。日本でも基本的には同じはずですが、もし、子供が万引きをすると、これは明らかに親が責任をとることとなります。しかし、なぜか日本は学校の先生が万引き被害にあったお店に呼び出される。本来ならば先生や学校は無関係のはずです。

これは小中高生生だけではありません。奇妙なことに大学生にも適用されます。ある日本の大学生が海外研修旅行で、現地の歴史的建築物に落書きをするという「事件」が起きました。彼らが通っている大学の副学長がわざわざ謝罪に行きましたが、これは、なんとも馬鹿げた話です。成人でしたら彼らが責任を取らねばなりません。未成年でしたら彼らの親が責任を負うこととなります。西欧諸国に関していうと、学校関係者が謝罪に来ることじたい、不思議で仕方がないのではないのでしょうか。

〔出典〕高松平蔵『ドイツの学校にはなぜ「部活」がないのか 非体育会系スポーツが生み出す文化、コミュニティ、そして豊かな時間』晃洋書房、2020年。

※ 出題に際して、一部を抜粋し、文章を再構成しています。